

「タイ・チュラロンコン大学サマープログラム参加報告書」

京都大学法学部3回 米倉大介

今回のサマープログラムは私にとって初めての海外研修であった。2週間という限られた期間ではあったが、その中でタイ語をはじめとして、タイの文化や歴史についての授業が行われた。まずタイ語の授業に関して言うと、主に「話せる」タイ語が中心であった。この点に関しても、読解を重視する日本の語学学習との違いを感じた。歴史・文化に関しては、実際に寺院や歴史遺構に足を運んだ。特にアユタヤ研修に関しては、アユタヤそれ自体の歴史的価値の高さはもちろんのこと、アユタヤをはじめとする歴史の専門家の方に帯同していただき、非常に詳細な説明を受けることができた。また、授業の多くは英語を用いて行われたため、付随的に英語力も向上させることができた。これらの経験が自分にとっての「完結」ではなく「発端」とすることができるように、これからも持続的にタイをはじめとする東南アジアの歴史・文化について学んでいきたいと考えている。

大学のプログラム以外でも、自由時間を使って様々な経験をした。派遣先大学の学生との交流はもちろんのこと、実際にバンコクの街に出て現地の人々とも積極的なコミュニケーションをとった。人種や性別、職業などについて多様なバックグラウンド持つ人々と英語・タイ語・中国語を交えて交流した。英語で意思疎通を図ることはもちろんであるが、タイ語などローカルな言語を用いることで、私に対して相手方もより親身になって対応してくれたことが印象的であった。この生の交流の中で私は、以前旅行で訪れた時よりも明確に日本とタイの違いを理解できたと感じている。特に私に強烈なインパクトを与えたのが、「貧富の差」である。放課後街に出てレストランやバーに行く途中に見るのは、高層ビルの並ぶオフィス街とその陰で物乞いをする人々であった。世界の中では「発展途上国」として位置づけられるタイという国であるが、「発展」を進めていくにつけて生じる「富裕層」と「貧困層」のギャップの大きさは、正直私の想像を超えるものであった。この問題が国として成長していく中で果たして不可避なものであるのか、といった観点から国際理解・研究をしたいという意識が非常に高まった。

今後の進路に関して、私はもともと「世界に目を向けた仕事がしたい」と多分に抽象的な気持ちがあった。そして、今回の上記のような経験を通して、タイ、東南アジア、そして発展途上の諸国における可能性と課題を実感することができ、世界の中の「発展途上」という分野に着目していきたいと考えるようになった。そのためにも、今回のこのサマープログラムを契機として、さらなる長期間の留学やインターン、海外就職について自分が何をすべきかを考えて選択していきたいと感じた。